

# 防大現役学生の国際的活躍～留学経験学生の声～

## 大韓民国空軍士官学校 派遣報告 人間文化学科 4 学年 鍵山 怜子



「近くて遠い国」と言われる韓国。空軍士官学校での1年間は、毎日が刺激的で、涙と笑いの連続だった。言葉が分からないなかでの毎日の授業、猛暑の空挺訓練、結構頻繁にある4年生からの指導など、大変なことも多々あったが、情の国である「韓国」の温かい人々に支えられ、多くのことを学んで帰国した。

名誉を何よりも重要視する韓国の学生の、士官候補生であることへの誇り、将来国防を担う者であるという自覚には感銘を受け、防大生もこうでなければと痛感した。勉学第一で、英語教育も徹底して行っている体制についても、手本にすべきところがあると感じた。

しかし、防大生の精神力・体力・行動力は、彼らに負けていない。陸・海・空の学生が共に学び、校友会に打ち込んでいることも、私たちの強みである。

また、当初はあいさつすら怪しかった私の韓国語は、最後には韓国人みたいと言われるほどに成長した。語学力の向上は、長期派遣だからこそ可能なことである。

私はこの貴重な経験を活かし、将来、より良い日韓関係のために必ず貢献できるよう努力したい。そして、後輩たちには長期派遣にぜひ挑戦してもらい、韓国について、日本について考える大きなチャンスにしてほしいと思う。



右が本人



## 「豪国防軍士官候補生学校を研修して」 電気電子工学科 4 学年 若月 豪

21年度8月後半から9月はじめにかけて、約10日の間、私を含めた55期の3名は豪国防軍士官候補生学校、通称ADFAへ研修に行きました。

ADFAは陸・海・空統合の士官学校で他の大学と提携することで学位が取れるところなどは防大にとっても似ていました。しかしながら、部屋が一人に一室貸与されており、ほとんどの学生が車を所有していました。

また、上下関係はほとんどなく、点呼等もほとんど真面に行われていませんでした。

けれども、日々の授業や訓練は皆、積極的に実施していて防大との大きな差を感じました。士官候補生学校もそうでしたがオーストラリアにはゆったりとした空気が流れていました。アメリカのバスがスケジュール通りに運行していないのと同じように、オーストラリアの人々も時間にルーズでした。仕事の前や食後の時間、必ずといってよいほどコーヒータイムがあるのはすごく印象的でした。

機会があれば個人的に行ってみたいです。



右から3番目が本人



一緒に留学した仲間と、中央が本人



## 米陸軍士官学校 感想

建設環境工学科 4 学年 澤田 晃平

まず、米陸軍士官学校学生の学業に取り組む姿勢に驚かされた。勉強をするためにこの学校に入ったという自覚がある学生が多かった。理工系の授業の教官は現役の軍人が多く、授業内容は日本でのものより工学的だった。

次にクラブ活動に関しては、一部のクラブを除けば防大の校友会活動に近かった。ただし激しさは防大の校友会ほどではなく、試合に勝つというよりその競技を楽しむという姿勢が見られた。

ウエストポイント内でのことももちろん印象に残っているが、アメリカの大学に留学している日本人との出会いも思い出深かった。アメリカの大学に進学希望の人や、野球の球団運営の仕事に就くことを目標としている人など日本国内ではなかなか会うことができないようなユニークな日本人と知り合うことができ、とてもいい経験になった。

しばらくの間は英語がわからなくてかなり戸惑ったが、学校の内外でさまざまな体験ができ、非常によい留学になったと思う。





## 派遣後の所感～平成21年度連合王国派遣学生

公共政策学科 4学年 中田 道也

私は平成21年10月5日から同年10月24日までの間、連合王国（英国）陸・海・空士官学校における士官候補生の教育・訓練・生活を研修した。

連合王国には防衛大学校のような、言わば予備士官学校に相当する機関は存在しない。そのため、士官候補生の多くは一般の大学を卒業した後、陸・海・空各士官学校に入校する。

防衛大学校では基本的に18歳から大学教育を実施しているので、連合王国と比すれば、4年間分多くの教育関係費が投入される計算になる。

私たち防衛大学校学生は、他国の士官候補生が一般の大学において教育を受けている間に、軍事教育を受けつつも大学教育を受けることが可能である。防衛大学校という機関の存在するメリットはそこにあるのではないだろうか。

海外派遣で防衛大学校の存在意義や学生としてのあるべき姿を再確認することが出来た。

防衛大学校を卒業するまで半年を切ったが、海外派遣において確認したことをこれからの生活に役立て、また、防衛大学校の発展に資することが出来れば幸いである。



右が本人



一緒に留学した仲間と、左が本人



## 平成21年度タイ王国派遣学生

機械システム工学科 4学年 野本 祥平

昨年度、私はタイ王国への派遣という貴重な機会をいただき、タイ王国陸・海・空軍士官学校における学生舎生活や教育、訓練の研修を行なった。

派遣の目的はもちろんのこと、本科学生という立場から防衛大学校の優れた点、改善すべき点を見直す良い機会であることを銘記して臨んだ。私が本校の優れた点だと感じた事項を1つ紹介したい。

タイ王国では陸・海・空軍それぞれ士官学校が独立しており、それぞれが異なったモットーのもと日々教育、訓練に励んでいた。一方で防衛大学校では学生綱領「廉恥・真勇・礼節」を基調とし、勉学・学生舎・校友会を3本柱として掲げ、この両立を果たすべく日々努力している。

ここで大きく異なっていたのが校友会（課外活動）の重要度である。タイ王国では課外活動の自由度は高く、学生はあまり積極的に取り組んではない。かたや本校では学生の主体性を涵養する場であり、その重要度は非常に高く、校友会活動が存在する意義は大きい。

このように派遣を通して学んだことを、我々の生活をより良いものにする資として活かせるよう、残り少ない在学期間を無駄にせず努力する所存である。



右が本人





## 中国派遣の感想

機械工学科 4 学年 小野 亜李沙

昨年初めて実施された中国派遣は、交流の薄い国だけに派遣第一号である私達の言動は、「日本の士官候補生」としてだけでなく、「日本人」の尺度となるという重責を担うものでした。

念入りな事前準備をして向かいましたが、現地で不測の事態に見舞われることもあり、決して楽しいばかりの派遣ではありませんでした。しかし、中国の士官候補生と共に生活した日々はとても充実しており、交流を深めることによって彼らの人間性に感銘を受けました。

本派遣は他国の士官学校の制度等を理解するより、学生間の相互理解が最重要となると感じました。英語能力が不足していたために、日本における知識を伝えることが不十分であったと反省していますが、日本人の印象が良くなったと言われ、派遣の成果を実感しています。中国での貴重な経験を今後の糧にして、将来はぜひ中国に関わる任務に従事したいと考えています。百聞は一見に如かず、ぜひ後輩にも中国を肌で感じてほしいと思っていた矢先、日中関係が変化し、今年度の派遣が延期になりました。

将来を担う若い世代による相互理解は日中友好の懸け橋になると確信していただけに非常に残念ですが、またこうした素晴らしい機会ができることを願っています。



後から 2 列右目矢印の先が本人



前から 3 列目右から 7 人目が本人



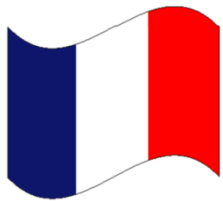
平成21年度 ドイツ派遣学生  
通信工学科 4学年 藤本 周作

今回の海外派遣によって、私は大きく、3つのものを得ることができた。1つ目は、ドイツの安全保障の考え方及び軍隊・士官候補生の状況等を確認することができ、日本の国防について改めて考えることができたこと。2つ目は、日本を海外から見ることにより、日本の良さを改めて実感し、更なる愛国心が醸成されたこと。3つ目は、国際感覚を身に付けることの重要性を実感し、そのきっかけとすることができたことである。

海外派遣を通じて、私の視野は確実に広がったと実感している。今後は、広い視野を意識して防大生活を送っていくのと同時に、任官後も、海外研修した経験を活かして全力で職務を全うしていきたい。



右が本人



フランス派遣  
地球海洋学科 4学年 吉田 数馬

はじめまして。平成21年度、フランス派遣学生の4学年 吉田数馬です。さて、私は入校当初から、「我々が切磋琢磨し、競争しなければならないのは、共に防大に学ぶ同期ではなく、海外の士官候補生である」と言われ続けてきたわけではありますが、派遣ではそれを強く実感しました。

フランスの士官候補生は非常に意識が高く、愛国心に満ち溢れていました。また非常に気さくで、私たち防大派遣学生もすぐに溶け込むことができました。士官学校には欧米諸国、アフリカからの留学生も多数おり、彼らとも積極的に交流でき、有意義でした。

こうした交流が、将来の世界的な平和に少しでも寄与できれば、この派遣は大きな意味を持つのでしょうか。



右が本人